

江戸遺跡研究会 第135回特別例会のご案内

日 時：2012年7月16日（月）13:00～

内 容：

- ① 黒澤 照弘 氏（群馬県埋蔵文化財調査事業団）
「東宮遺跡 一天明三年新暦8月5日の様相―」
- ② 荒井 健治 氏（府中市教育委員会）・板倉 歓之 氏（共和開発株式会社）
「府中市武蔵国府跡御殿地区の発掘調査」（仮題）
- ③ 渡辺 芳郎 氏（鹿児島大学）
「近世薩摩焼の生産と藩外流通」

会 場：江戸東京博物館 会議室（大会を行うところ）

交 通：J R 総武線両国駅西口改札 徒歩3分
都営大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）A4出口 徒歩1分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室
03-5452-5103（堀内・成瀬）

江戸遺跡研究会公式サイト
<http://www.ao.jpn.org/edo/>



※何かご不明な点などございましたら例会係の方までお問い合わせください。

◇江戸遺跡研究会第134回例会は、2012年5月16日（水）午後7時より江戸東京博物館学習室2にて行◇
◇われ、川西直樹氏より以下の内容が報告されました。◇

牡蠣殻採掘坑について

—近世江戸における地下資源の採掘—

川西 直樹

(加藤建設株式会社)

1. はじめに

遺跡の調査において検出される遺構は、地中を掘削して構築される遺構に限定すれば、その構築目的には、住居址、墓坑、柱穴、溝、地下室、ごみ穴などの「地下に空間を確保する目的」、黒曜石採掘坑、粘土採掘坑、土取穴などの「地下にある資源を採掘する目的」などが考えられる。今回紹介する「牡蠣殻採掘坑」は、後者の「地下にある資源を採掘する目的」とする遺構で、東京都台東区（特に浅草を中心とした地域）において検出されている。

「牡蠣殻採掘坑」とは、胡粉生産の際、原料となる自然堆積層中の牡蠣殻化石を採掘する目的で掘削された土坑で、台東区No. 68 遺跡（以下、No. 68 遺跡とする）で初めて検出された遺構である。これらの土坑は近世に構築されたもので、複数の方形、あるいは長方形の土坑が規則的に並び、さらに、各遺構はほぼ同様な規模・土層の堆積状況を示すなど、配列的・形態的に規格性を持つという特徴を持つ特殊な遺構である。その後、周辺の発掘調査の進展により、No. 68 遺跡と同様な特徴を持つ遺構が確認されるようになり、調査地周辺で牡蠣殻の採掘が行われていたことが判明しつつある（川西 2004・2010）。

今回の発表では、「牡蠣殻採掘坑」がどのような特徴を持つ遺構であるのか、さらにこれらの遺構がどのような地域で検出されるのかを中心に述べたい。

2. 牡蠣殻採掘坑の検出事例

牡蠣殻採掘坑が検出された遺跡は、台東区の3遺跡のみで、台東区No. 68 遺跡、同No. 120 遺跡（以下No. 120 遺跡とする）、同芝崎町二丁目遺跡である。

(1) No.68遺跡・No.120遺跡

No. 68 遺跡は東京都台東区浅草 1-43 に、No. 120 遺跡は台東区浅草 2-11 に所在（図1）し、地理的には、武蔵野台地の東側に広がる東京低地に立地し、隅田川西岸の微高地に繋がる後背湿地に位置している（図2）。調査地は、江戸前期は浅草寺の本坊、あるいは林にあたり、元禄頃から浅草寺の火除地となる（図5）。その後、正確な時期は不明であるが、同地は水田として利用されるようになる（図4）。

調査地の基本層序は上位より大きく近代、近世の盛土、自然堆積層の順で堆積している（図5）。このうち4～6層はシルトを主体とした近世の盛土層で、その下位には自然堆積層である7～9層が堆積している。

自然堆積層のうち、8層は灰色シルト中に牡蠣殻を多量に包含する層で、層厚は約 1.8 mを測る。牡蠣殻は

貝長が 170cm を測るかなり大型のもの（図 6）で占められるが、下位になるほど細片が多くなる傾向にある。9 層は灰色砂層で、カガミガイやナミマガシワ、マガキ、アカニシなどの多種の貝（図 7）を包含する層である。貝の組成分析から、8 層はカキ礁、9 層は遠浅の環境であったものと推測されている。また、年代測定から牡蠣礁は弥生時代に形成されたものと推定されている。

なお、周辺の遺跡調査では、浅草寺の本坊付近（浅草寺遺跡）では砂層が、隅田川沿岸付近（雷門遺跡）では砂利層の自然堆積層が検出されている。

No. 68 遺跡 牡蠣殻採掘坑は、調査区の北側で第 8 号・第 31 号・第 32 号・第 34 号・第 35 号遺構の 6 基（8 号グループ）が、南側で第 11 号・第 12 号・第 36 号・第 37 号遺構（11 号グループ）の 4 基が検出されている（図 8）。平面形態は長方形を呈し、主軸方向は北側の 8 号グループが東西方向、南側の 11 号グループが南北方向で、各遺構は 0.7m ～ 1.0 m 間隔で規則的に並んでいる。規模は長軸約 2.00 m、短軸約 1.60 m を測る。深さは確認面から約 1.3 m を測るが、推定遺構廃絶年代が幕末頃と推測されることから、その構築面である基本層序の 4 ～ 5 層から掘り込まれていることが考えられ、実際の遺構の深さは 2.5 m 程を有していたものと思われる（図 10）。遺構の底面は、牡蠣殻の自然堆積層の 8 層を掘り込み、その下位に堆積する多種の貝を含む 9 層の砂層直上まで達している。断面形は凹形を呈し、壁面は垂直でやや凹凸があり、底面は平坦である。（図 11）。

覆土は主体土、混入物により上位から黒灰色シルト層（Ⅰ層）、灰色シルト層（Ⅱ層）、灰色砂層（Ⅲ層）の 3 層に大別される（図 10）。

Ⅰ層は黒色を呈する有機質のシルトで、Ⅱ・Ⅲ層に比べて陶磁器類や木製品等の遺物を多く含む層である。また、オオタニシや食物残渣と考えられる貝類が出土している。Ⅰ層は陶磁器類や、食物残渣などと共に、短期間に埋め戻された覆土で、有機質土やオオタニシの存在から、最終的な埋め戻しに水田の耕作土が用いられたものと推測される（註 1）。

Ⅱ層は第 38 号遺構を除く各方形土坑に共通して見られる層である。混入物が少ない均質な灰色シルト層で、オオタニシを含む。北側の第 8 号遺構・第 32 号遺構・第 34 号遺構にはⅠ・Ⅱ層間に薄い炭化物層が認められ、ある時期に火災等の炭化物が遺跡全体に降り注いだ、あるいは流れ込んだものと推測される。また、このことから、北側の 8 号グループは同時期に開口していたことが推測される。Ⅱ層はその上位に薄い炭化物層が認められ、8 号グループにのみ共通して認められることから、8 号・11 号グループは異なる時期に構築されたことが推測される。また、これらの土坑には、オオタニシが含まれることから一定期間開口していたものと推測される。

Ⅲ層はⅡ層同様、各遺構に共通して認められる層である。色調は灰色を呈し、砂を主体としつつも、シルトを含む層である。また、牡蠣殻の碎片が層全体に均一に含まれている。特筆すべきことは、Ⅲ層上面の標高が各遺構でほぼ同じ標高であり、同環境下で同一時期における堆積の可能性がある。また、マガキの細片があり、壁面の崩落がないこと、陸産貝類がないことから、比較的速い段階で埋め戻されたことが想定される。

推定廃絶年代は、瀬戸・美濃系の磁器端反碗や寿文皿、文久永寶（初鑄年 1863 年）などの出土遺物の様相から 19 世紀第 3 四半紀頃と推測される。

No. 120 遺跡 9 基の牡蠣殻採掘坑が確認され、これらは規模・深度・堆積状況に共通性が認められる（図 9）。

遺構の配置や、出土遺物の様相から、少なくとも 3・17・24・25 号土坑、5・27 号土坑、13・18 号土坑の 3つのグループに分けられる(小俣 2009)。規模は、平面形は概ね 2.2m の正方形を呈し、深さは確認面から 1.0 ～ 1.5m を測る。断面形は凹形を呈し、壁面は垂直、底面は平坦である。土坑の底面は、牡蠣殻層の中程まで掘り込まれている。遺構の配置は南北が 3.7 m 間隔、東西が 0.7m 間隔で配されている。このうち、27 号土坑は平面形の規模は他の遺構とほぼ同じであるが、掘削深度は浅く、牡蠣殻層の上面で止められている。周囲の牡蠣殻採掘坑を切ることから、牡蠣殻採掘に適さないと判断し、掘削を断念したものと考えられる。覆土は工事の関係上、掘削深度が低いため判然としないが、上層は植物腐食土を含む黒色、あるいは灰色シルト層、下層は概ね灰色のシルトに砂を含む層で構成される。上層からは陶磁器や木製品が多く出土し、これに対して下層からの出土は少ない。

遺構廃絶年代は 18 世紀末～ 19 世紀前半頃である。

(2) 台東区芝崎町二丁目遺跡 台東区芝崎町二丁目遺跡(以下、芝崎町二丁目遺跡とする)は、台東区西浅草 3-22 に所在する。No. 68 遺跡の北東側約 300 m に位置する。江戸時代は水田として利用されている。13 基の牡蠣殻採掘坑が確認され、遺構の規模、深度、堆積状況に共通性が認められる(図 13)。遺構の配置や出土遺物により、構築時期が異なり、少なくとも 10・11・16 号遺構の A 群(19 世紀前葉)、17・19・21 号遺構の B 群(18 世紀初頭～前葉)、12・13・14 号遺構の C 群(18 世紀中葉)、26・27・28 号遺構の D 群(17 世紀後葉～18 世紀初頭)の 4つのグループに分けられ、これらは D→B→C→A の順に変遷する(小畑 2009)。各遺構の配置は南北あるいは東西を軸とし、グループにより間隔が不規則であるが、概ね 1 ～ 1.5 m 間隔で一列に並んでいる。平面形は約 2.1 ～ 2.3 m の正方形あるいは長方形を呈し、深さは 0.6 ～ 1.4 m を測り、底面は牡蠣殻層の途中で止められているが、各遺構の掘削深度はほぼ同レベルである。断面形は凹形を呈し、壁面は垂直、底面は平坦である。覆土は、上層が遺物を含む黒色シルトや暗褐色シルト、下層は青灰色シルトや砂質シルトを主体とする(図 14)。上層からは陶磁器や、食物残渣の貝が多く出土し、これに対し下層からの遺物の出土は少なく、細片化した貝などを含む。また、出土層位は不明であるが、オオタニシの出土が目立つ。これらの層は、各群により堆積過程の共通性が認められることから、同時期に掘削され、同時期に埋め戻されたことが看守される。

3. 牡蠣殻採掘坑の特徴

上記の各遺跡から検出された牡蠣殻採掘坑を比較すると、以下のような特徴を上げることができる。

- (1) 平面形は長方形、あるいは正方形を呈し、数基を一単位とし、重複しないで一定の間隔を持って規則正しく配置されている。
- (2) 掘削方法に共通性が認められる。具体的には、掘削は垂直に行われ、底面は牡蠣殻層、あるいは牡蠣殻層が尽きる砂層まで達している。
- (3) 覆土は、下位は混入物が少なく、牡蠣の細片が含まれた砂質土、上位は遺物を多く含む黒色シルト層で埋め戻されている。

①については、平面形はNo. 68 遺跡で長方形、No. 120 遺跡・芝崎町二丁目遺跡は方形を呈している。これらの遺構は、一定の間隔を持って規則正しく配置されている。また、牡蠣殻採掘坑の覆土の様相からいくつかのグループに分けることができる。このことから掘削は単体ではなく、少なくとも3～6基を1単位として掘削されたものと推測される。また、重複しないことは、No. 120 遺跡の27号土坑が掘削途中で断念されていることから分かるように、牡蠣殻は一度採掘するとその場所では掘削できないことによるものと考えられる。

No. 68 遺跡やNo. 120 遺跡、芝崎町二丁目遺跡の遺構群の軸方向は、調査地の区画の軸とほぼ同じであることが注目される。これらの遺跡の区画は、江戸時代から概ね踏襲されており、遺構群は区画の影響を受けていた可能性が考えられる。このような区画の影響を受ける事例では、京都大学病院構内遺跡 A-J19 区 (図 16) で検出された土取り穴 (近世) があり、幅 1 m の畑の畔を破壊しないように採掘が行われている (五十川 1991)。また、大阪府加治・神前・畠中遺跡で検出された粘土採掘坑 (近世) で、「大単位同志の間で、幅約 0.5 m 程度で帯状に粘土採掘が及んでいない部分が存在し、採掘時に上面の畦を破壊せずに、水田の区画内を採掘していることが読み取れる。」という指摘がある (前川 1997)。No. 68 遺跡を見ると、北側の単位と南側の単位では、北側の第 8 号と南側の第 37 号や第 12 号、北側の第 38 号と南側の第 36 号・11 号が同軸上にあり、第 19 号や第 23 号遺構の溝を破壊することなく、これを避けるように東側に展開している。また、芝崎町二丁目遺跡でも、C 群と D 群、B 群と D 群の東西方向の軸が同軸上にある。このことから、牡蠣殻採掘坑の配置は水田の区画の影響を受け、水田の区画内を採掘しているものと考えられる。

②の掘削方法の共通性のうち、掘削が垂直に行われることについては、粘土採掘坑は東京都文京区原町東遺跡や、兵庫県筒江浦石遺跡 (図 17) の事例のように、目的の層に達すると水平に掘削し、結果的にオーバーハングとなるものが多く、牡蠣殻採掘坑と掘削方法が異なっている。しかし、波志江中宿遺跡の粘土採掘坑では「掘削すべき粘土層がかなり深い位置に存在することから (中略) 壁面を崩しながら横方向へと次々と粘土層を掘り抜いていくことが危険であり、不可能であったため」という指摘があるように、掘削する層の厚さと、掘削する層の脆さの違いと考えられる。具体的には、粘土採掘坑は採掘する層の厚さが数 cm であるのに対し、牡蠣殻層は約 1.8 m 程の厚さを持つことから、水平方向の掘削の必要性はなく、また、地盤が弱いことからオーバーハングすることで、壁面の崩落の危険性が考えられる。また、垂直に掘ることは、オーバーハングなどによる壁面崩壊を極力抑えるばかりではなく、採掘量 (註 2) を減らさないような合理的な掘り方であったものと推測される。また、丹波立坑焼の窯場では、陶土は坪単位で売買され、採掘量が算定しやすいように地面を方形に掘り取っているという (五十川 1991) ように、採掘量の算出のために、同規格の遺構が掘削された可能性が考えられる。また、底面が牡蠣殻層、あるいは牡蠣殻層が尽きる砂層まで達していることは、牡蠣殻の採掘を目的としていたと考えられ、牡蠣殻が尽きると掘削を止めるものと考えられる。

③については、下位の層は牡蠣殻の細片を含む砂層やシルト層であることから、牡蠣殻層から牡蠣を抜き出した後の残土と推測される。群馬県波志江中宿遺跡の粘土採掘坑 (古墳時代) (図 15) では、掘削土を隣接する採掘坑内へと投げ入れられているため、覆土にいわゆる天地返し現象 (自然堆積層の逆転現象) が認められる。これに対し、牡蠣殻採掘坑の覆土は、下位に耕作土や自然堆積層が堆積した形跡は認められず、また、各遺構

の覆土に共通した堆積状況が認められることから、同時期に同じような土で埋め戻されたことが推測される。このことから、恐らく掘削土や採掘した牡蠣殻層は周辺に一度仮置きされていたものと考えられ、同時に複数の遺構が掘削され、開けられた状況であったことが想定される。

上位の黒色シルト層は、最終的に水田に復旧するために入れられた覆土で、掘削土中の牡蠣殻を抜き取り、不足した分の土を周辺の耕作土とともにごみを投棄したものと考えられる。上位と下位の覆土の間には、時間的な開きがあるが、これは、後述する史料1に正月に「土取候跡穴」の記載があることから、窪みのような状態で放置されていた可能性が考えられる。このような窪みは水田使用時には障害となることから、遅くとも田植えの時期には完全に埋め戻され、整地されたものと考えられる。また、このことから牡蠣殻の採掘は、収穫から田植の間の農閑期に行われていたことが窺われる。

4. 文献に見る牡蠣殻採掘

調査地周辺の牡蠣殻採掘の記録には、次のようなものがある。

史料1

「浅草寺囲外火除地支配名主五郎左衛門奉申上候、右場所ニ土取候跡穴内ニ生子捨有…」

『浅草寺日記 天保八年 正月十六日』 (天保八年(1838))

史料2

「此邊(橋場)付近蠣殻の名産にて、田の下を一尺五寸(約 0.45m)ほど掘見れば、かきがらあり、深さ五尺餘(1.5m)の内、のこらずかきがらなり、ごふんを製するに、ここより出るを最上の品とす。」

『墨水遊覧誌』(文政十一年(1829))

史料3

「御火除地百姓大和屋惣兵衛奏申上候、私儀先年存立御田地之内西之方江寄り候場所 蠣殻掘出し胡粉製法仕居候処、去ル天保十五辰年中私儀御火除耕作仕候由緒并御作事拝借仕候儀共御調之砌、胡粉製仕候儀同様御調ニ付…弘化四年 四月十日」

『浅草寺日記』(弘化四年(1847)) (下線は筆者による)

史料1は、浅草寺の火除地内に牡蠣殻採掘の具体的な内容は記載されていないが、「土取跡穴」という記載が認められる。記載にある「土取跡穴」は、火除地内にあることから牡蠣殻採掘の痕跡と推測される。さらに文献が記載された日付が1月の正月であることから、牡蠣殻採掘坑が1月頃に掘削された、あるいは1月になっても完全には埋め戻されていなかったことが読み取れる。

史料2は、浅草北部の橋場付近で水田の下を一尺五寸(約 0.45m)ほど掘削すると牡蠣殻層となり、深さ五尺(1.5m)は牡蠣殻層であることが記載されている。なお、No. 68 遺跡での基本層序の観察では、牡蠣殻層は1.8mの厚さがあることが確認されたおり、No. 68 遺跡よりもやや薄い堆積であることが分かる。また、採掘された牡蠣殻から胡粉が製造されていたことが読みとれる。

史料3では、浅草寺火除地内の百姓が胡粉製造の為、火除地西方に堆積する牡蠣殻の採掘の許しを願い出て

いる。

この他に、胡粉製造の記録には『吾妻名所図繪』（文化五年（1809））に「浅草の地胡粉の産地」とあり、また『続江戸砂子』に「浅草胡粉」、『江戸鹿子』に「浅草橋場で胡粉を売る店あり」とあることから、浅草周辺では水田下の牡蠣殻を採掘し、胡粉を製造していたことが分かる。

5. 牡蠣殻の採掘地

近世江戸における胡粉の生産地は、『吾妻名所図繪』（文化五年（1809年））や『墨水遊覧誌』（文政十一年（1829年））に記載が認められるように、浅草や橋場で生産が行われていたが、都市化（町屋化）により汐入村付近（現荒川区）に移動したという。牡蠣殻の採掘には集積スペースが必要であり、さらに採掘した貝の洗浄、加工場所等の広いスペースが必要となることが想定される。また、一度採掘した場所からは採掘ができなくなるため、新たな採掘場所を選定する必要がある。さらにこれを繰り返すと、牡蠣殻の掘削により軟弱な土地になることが想定される。このことから、牡蠣殻の採掘にはある程度の広い土地が必要で、かつ土地の軟弱化の影響を受けないという条件が必要となる。このような条件に水田（耕作地）が適していたものと考えられ、結果的に農家の副業として成立したものと考えられる。これに、資源が豊富な場所、すなわち、牡蠣殻が厚く堆積する場所が条件として加わるものと考えられる。

従って、今後、牡蠣殻採掘坑が発見される場所を推定する上で、牡蠣殻層が堆積する範囲を把握することは重要であると考えられる。ここでは、牡蠣殻層の形成過程と、その堆積範囲について考えてみたい。

牡蠣殻層を構成するカキは、マガキ（学名 *Crassostrea gigas* (Thunberg)）と呼ばれるカキの種類の一つである。*Crassostrea* 属のカキは固着性の浮遊物食者で、左殻で他物に固着し、主として潮間帯で海底面に立って生活し、海底面より上に体の主要部分で露出する。内湾汽水域の砂泥底が主要な生息地で、内湾の干潟に大きな群落—カキ礁—を作って密に生活している（図 18・20）。カキ礁は成体のカキの上に次の世代が付着し成長し、次々と積み重なって形成される（リレー戦略と呼ばれる）（図 19）。カキの幼生が着生する水深は潮間帯に限定されるため、カキ礁の存在はそこが内湾汽水域の潮間帯であったことを示すと考えられている（鎮西、1982）。

牡蠣殻層の堆積した年代は C14 年代測定から、弥生時代中期～後期頃という分析結果が出ている。弥生時代の海岸線は図 21 によると、現在の千住の北側付近にあり、台東区や墨田区・荒川区等がほぼ海面下となっており、この範囲に海進、あるいは海退などによる時期差はあるものの、カキ礁が形成される内湾の干潟が広がっていたものと考えられる。

では、実際に牡蠣殻層がどの範囲で広がっていたのであろうか。堆積範囲の復元には、考古学的な調査の他に、東京地下鉄銀座線の建設に先立って行われた、品川～南千住間の地質調査（神保 1922）（図 22）を援用し、台東区・墨田区を中心に牡蠣殻層の堆積範囲を復元した（註3）（図 23）。図を見ると、隅田川の兩岸に広がる微高地の範囲は、河川による浸食、あるいは比較的早く陸化したことから、この範囲には堆積は認められず、牡蠣殻層はその外側に広がっていたものと推測される。台東区側では、上野台の台地に向かうにつれてその層厚は減じる傾向にあり、台東 1-34 遺跡付近では認められなくなる。このことから、台東区内では、東は隅田川の微高地から、西は東上野から台東 1-34 遺跡をつないだ線が牡蠣殻層の堆積する範囲であり、南北に

帯状に堆積していたものと考えられる。一方、墨田区側では隅田川沿岸から、ほぼ墨田区全域に広く分布している。これらの牡蠣殻層の形成年代は、北区中里貝塚では、縄文時代後期、No. 68 遺跡や横網一丁目遺跡では弥生時代後期、江東橋二丁目遺跡では古墳時代の結果が出ており、遺跡の位置により年代が異なることから、各時代の海岸線の位置によって、異なるカキ礁が形成されたものと考えられる。上記の場所の他には、近代では綾瀬川沿岸の葛飾や千葉県船橋などから買入れた（有馬 1925）ということから、葛飾区以西を含めた、東京低地の広い範囲に堆積しているものと推測される。

6. 掘削された牡蠣殻の利用

採掘された牡蠣殻の大部分は胡粉や貝灰（註4）へと加工される。胡粉への加工は、採掘した後、「木桶の中に石臼を置き、カキ殻を水挽きして、濁った水を別の桶にくみ取り、濁り水を沈殿させ、上ずみをすてて乾燥させて製品としていた」という工程で作られる（井上 1996）。なお、江戸時代から近代にかけて胡粉生産の盛んであった汐入（現荒川区南千住付近）では、胡粉製造時に胡粉を粉砕するのに用いられた石臼が、神社や商店街にモニュメントとして置かれているという（野尻・小川 2005）。なお、牡蠣殻の掘削は、No. 68 遺跡・No. 120 遺跡、芝崎町二丁目遺跡は絵図や文献史料などから水田にあたり、さらに、先に示した史料3の『浅草寺日誌』では、火除地内の農民が収入の不足分を補う為に浅草寺に採掘の許可を願い出ていること、大正 14 年の有馬頼寧氏の「汐入村の変遷」には「副業として昔から胡粉の製造を行っていた。」という記載があることから、農民の副業であったことが考えられる。採掘場所や年代の異なる芝崎町遺跡とNo. 68 遺跡での牡蠣殻の採掘方法が共通することや、胡粉への加工課程等を考慮に入れると、ある程度の専門的な技術が存在することが考えられ、農民間での牡蠣殻の採掘方法や胡粉製造技術の交流があった可能性が考えられる。

加工された胡粉は、江戸時代後期からの胡粉出荷時の袋（胡粉袋）に印刷された商標が紹介されており、商標に記載されている内容から、胡粉は江戸のみならず、京都へも出荷され、汐入の胡粉がブランド化されていたことが述べられている（野尻・小川 2005）（註5）。胡粉の利用としては、漆器・仏壇・仏具の下地、人形、面、絵画などに用いられる。実際に遺跡から出土した遺物で、胡粉が遺存している例は少ない。これは、胡粉が剥離しやすいと考えられる。出土例としては、汐留遺跡 133 号出土の羽子板の絵付、台東区豊住町遺跡 100 号遺構出土の位牌の漆の下地に用いられている例がある。また、この他に土製品の人形などに、彩色の下地や白色顔料として用いられている例があり、出土遺物に僅かに遺存している例が認められる。なお、『和漢三才図絵』には、牡蠣殻が地形や漆喰の代用として利用されていたことが記されている。牡蠣殻層を地業に直接用いた例は、管見の限りないが、縄文時代の貝塚の貝を用いた例が北区袋低地遺跡や千代田区外神田四丁目遺跡で認められる。

7. おわりに

『江戸の特産品』の「汐入の面胡粉」で、野尻かおる氏と小川望氏は「牡蠣殻という“資源”が存在するという立地が、この地域（汐入）に面胡粉という江戸では数少ない特産品を生んだ（中略）他産地の存否などの問題が課題である。」と指摘している。両氏が指摘するように、「資源」＝「牡蠣殻層」の存在が胡粉という特産品を生み出す大きな要因であると思われ、「他産地の在否」の確認は重要であると考えられる。今回紹介し

たNo. 68 遺跡やNo. 120 遺跡、芝崎町二丁目遺跡での牡蠣殻採掘坑の発見は、「他産地」の存在を示唆したものである。江戸時代では、ロームなどの良質な土が売買されており（註7）、このような痕跡は採土坑、あるいは土取穴として検出されている例は少なくない。新宿区坂町遺跡では、東西 19.5 m以上、南北 2.5 ~ 5.6 m、深さ最大 4.4 mにおよぶ大型の採土坑が組屋敷内から検出されており（註8）、この他にも小規模なものは旗本屋敷などでも検出されている。牡蠣殻の堆積は、東京低地に広く分布しており、仮に採掘した牡蠣殻が土と同じように商品として売買されていたとすれば、牡蠣殻採掘坑は今後、水田以外の武家地などからも検出される可能性も十分考えられよう。また、この他に、神奈川県鶴見、千葉県船橋の海岸などでも堆積が認められており、近代では綾瀬川沿岸（葛飾区）や千葉県の船橋などから買い入れている（有馬 1925）。このことから、今後、胡粉への加工はされなくても、「資源」である「牡蠣殻」のみを採掘する牡蠣殻採掘坑が他の地域で発見される可能性も考えられよう。

註

註1 オオタニシは田や湖沼の環境に生息する。

註2 0.10 × 0.10 × 0.10 mという少ないサンプルではあるが、116.8gの牡蠣殻が採取できたことから、採掘坑の規模 2.0 × 1.3 × 1.8 m (4.68 m³) で、546,600g (145.8 貫) 採掘できたことになる。

註3 東京低地の牡蠣殻堆積層は、主に有楽町層上部と下部で認められる。下部ではボーリング調査から、埼玉県草加市で地表面下 26 ~ 34 m、東京湾北西部域 37 ~ 46m で縄文海進最盛期頃に形成された牡蠣殻の堆積層が認められている。しかし、ここでは有楽町層上部で人力掘削可能な牡蠣殻層の堆積範囲を推定する。

註4 貝灰の原料は貝の種類は問わず、安価で大量に入手できるアサリ、ハマグリ、バイガイが用いられたという。しかし、後述するように、『南葛飾郡誌』では土産の自然物として「蠣灰」と記されていることから、牡蠣殻が貝灰にも加工されていたことが窺われる。

註6 版木には、「東京浅草橋場汐入村」や「胡粉屋七兵衛」など所在地や生産者の名前、さらに「京都萬壽寺通高倉東入繪具屋宇兵衛」や、「浅草駒形町近藤彦右衛門」などの胡粉取扱店の所在地や仕入者の名が記されている。

註7 五十川 伸矢 「土取りの歴史の変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告IV 京都大学病院構内遺跡の調査』 京都大学埋蔵文化財研究センター 1991

註8 新宿区坂町遺跡第4号遺構は採土坑と推測されており、底面は粘性の強い灰褐色ローム層まで達している。

引用・参考文献

荒川区役所 1755 『荒川区誌 上巻』

荒川区役所 1989 『荒川区史 上巻』

網野 宥俊編 1976 『浅草寺志 下』 名著出版

五十川 伸矢 1991 「土取りの歴史の変遷」『京都大学埋蔵文化財調査報告IV 京都大学病院構内遺跡の調査』 京都大学埋蔵文化財研究センター

井上好生 1996 「貝灰と胡粉工場」『史談会報 16号』 船橋市史談会

江戸遺跡研究会 2005 『江戸時代の名産品と商標』

小畑 直輝 2009 「考察」『芝崎町二丁目遺跡』 加藤建設株式会社

小侯 悟 2004 「総括」『台東区No.68 遺跡』 台東区文化財調査会

小侯 悟 2009 「総括」『芝崎町二丁目遺跡』 加藤建設株式会社

- 小俣 悟 2009 「総括」『No.120 遺跡 浅草二丁目 11 番地地点』ジオダイナミック
- 貝塚爽平編 2000 『日本の地形4 関東・伊豆・小笠原』東京大学出版会
- 貝塚爽平監修 1980 『東京都 地学のガイド—東京都の地質とそのおいたち—』
- 貝塚市教育委員会 1997 『加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要』貝塚市埋蔵文化財調査報告第 42 集
- 武蔵文化財研究所 2004 『文京区原町東遺跡』
- 川西 直樹 2004 「浅草寺火除地内に構築された長方形土坑の用途について—牡蠣殻採取坑の可能性の検討—」『台東区 No.68 遺跡』台東区文化財調査会
- 川西 直樹 2010 「台東区で検出された特殊土坑の性格について—牡蠣殻採取坑の可能性の検討—」『物質文化 89』物質文化研究会
- 久保純子 1994 「東京低地の水域・地形の変遷と人間活動」『防災と環境保全のための応用地理学』古今書院
- 群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001 『群馬県波志江中宿遺跡』
- 神保小虎 1922 『品川南千住間第一期東京地下鉄道沿線の地質鑑定の意見』
- 墨田区錦糸町駅北口調査団 1996 『錦糸町駅北口遺跡 I』
- 墨田区江東橋二丁目遺跡調査団 1997 『江東橋二丁目遺跡』
- 墨田区横川一丁目遺跡調査会 1999 『横川一丁目遺跡』
- 墨田区教育委員会 2002 『江東橋二丁目遺跡 II』
- 墨田区横網一丁目埋蔵文化財調査会 2002 『本所御蔵跡・陸軍被服廠跡』
- 墨田区大平四丁目埋蔵文化財調査会 2003 『大平四丁目遺跡』
- 浅草寺編 2000 『浅草寺日記 第二十一巻 自 天保八年 至 天保九年』金竜山浅草寺
- 浅草寺編 2004 『浅草寺日記 第二十四巻 自 弘化三年 至 嘉永三年』金竜山浅草寺
- 兵庫県教育委員会 2007 『兵庫県筒江浦石遺跡』
- 東京都埋蔵文化財センター 2001 『袋低地遺跡』
- 鎮西 清高 1982 「カキの古生態学 (1)」『化石 31』日本古生物学会
- 鎮西 清高 1982 「カキの古生態学 (2)」『化石 32』日本古生物学会
- 東京都荒川区教育委員会 1988 『汐入の民俗荒川区民俗調査報告書 (一)』
- 東京都北区教育委員会 2000 『中里貝塚』
- 東京簡裁墨田分室埋蔵文化財調査会 2008 『墨田区肥前平戸新田藩下屋敷跡』
- 東京簡裁墨田分室埋蔵文化財調査会 2007 『肥前平戸新田藩下屋敷跡』
- 野尻 かおる 1998 「牡蠣殻と汐入胡粉」『荒川ふるさと文化館だより』1 荒川区教育委員会
- 野尻 かおる・小川 望 2005 「汐入の「面胡粉」 『江戸時代の名産品と商標』江戸遺跡研究会
- 前川浩一 1997 「貝塚市内発見の近世粘土採掘土坑」『加治・神前・畠中遺跡発掘調査概要』貝塚市埋蔵文化財調査報告第 42 集 貝塚市教育委員会
- 南葛飾郡 1923 『南葛飾郡史』
- 吉川昌伸 2008 「肥前平戸新田藩下屋敷跡における環境変遷史」『墨田区肥前平戸新田藩下屋敷跡』東京簡裁墨田分室埋蔵文化財調査会
- 吉川昌伸 2002 「江東橋二丁目遺跡 II における環境変遷史」『東京都墨田区江東橋二丁目遺跡 II』墨田区教育委員会
- 吉川昌伸・吉川純子 2003 「自然科学分析の成果—太平四丁目遺跡における環境変遷史—」『東京都墨田区太平四丁目遺跡』墨田区太平四丁目埋蔵文化財調査会